

問一

①「猶予」は、「①ぐずぐずして決めかねること、②実行の時日を延ばすこと」の意。①「一刻の猶予もならない」、②「執行猶予」。

問二

b「あながち」(強ち)は、下に打消を伴って、「必ずしも・一概に・まんざら」の意味。「彼女の主張はあながち間違いとは言えない」のように、部分否定を表す。

問三

「眼(目)から火が出る」は、顔や頭を強く打ったとき、目の前が真っ暗になって光が飛び交うような感じがすることをたとえた慣用的表現。

研究コラム 《類比による修辭法》

擬声語(擬音語) 実際の音や声をまねて言葉とした語。

例 ごろごろ ばたん ざあざあ わんわん

擬態語 視覚・触覚など、聴覚以外の感覚・印象を言語音で表現した語。

例 にやにや ふらふら ゆったり つるつる

直喩

「たとえば・あたかも・さながら」「ようだ・ごとし」などの語を用いて、たとえるものとたとえられるものとを直接比較して示す技法。

例 白魚のような指 動かざること山のごとし

隠喩

暗喩。たとえを用いながらも、表現上は「ようだ・ごとし」などをを用いない技法。

例 頭に霜を置く(白髪になることのとえ)

問四

「**二樹の蔭(陰)** 一河の流れも他生の縁」は、たまたま同じ木の蔭に宿り、同じ河の流れの水を汲むのも、前世からの因縁によるものだという

つの理由になるだろう。ただし、設問には「猫に対する主人の心情」とあるので、この要素は解答に必須ではない。

問六

解答の根拠になるのは、おさんが「いきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した」から始まって、何度も「吾輩」を投げ出したという箇所(16~19行)。宿なしの猫を家に上げるわけにはいかないという、使用人としての使命を果たそうとしたのに、主人の言葉には逆らえずに猫を家に上げるを得なくなった。そのときの彼女の心情を察するのは難しいことではないだろう。その「口惜し」さが猫にぶつけられ、「台所へ抛り出した」(23行)という動作となったのだ。

また、「そのときにおさんという者はつくづくいやになった」「この間おさんの三馬を偷んでこの返報をしてやつて」(19・20行)など、現在に至るまで両者の葛藤が続いていることがわかる記述があり、今後の伏線となっている。小説ではこの後も、「吾輩」とおさんは何かにつけて対抗心を持ち、ライバルのような関係であり続けるのだ。

問七

選択肢判定

ア 無口であり活動的ではない。

「余り口をきかぬ人」(23行)「終日書斎に這入ったがり殆んど出て来ない」(25行)が正解。

イ

逆境にあるものを必ず助ける正義漢である。  
猫を助けたのは正義感が動機ではないので×。問五解説参照。

ウ

人生のつらさに苦悩する知識人である。  
「勉強家」のように「見せ」「美に染」なのに「不平」を言っているとは戯画化している。

エ

自分の言行の矛盾には無頓着である。  
主人の「毎夜繰り返す日課」(29行)から判断して正解。

オ

時に動物を虐待する残忍な性格である。  
「物指で尻をたたき叩かれた」(41行)とあるが「虐待」「残忍」とはいえないので×。

カ

裕福なので本来働く必要はない。  
裕福かどうか判断する根拠となる記述はないので×。

意味。「他生の縁」は「多生の縁」とも書く。また「袖振り合うも他生の縁」という言葉もあり、道行く知らぬ人と袖が触れ合うようなちよつとしたことも前世からの深い因縁によつて起こるものだという意味。ここは、「竹垣の崩れた穴」からもぐり込んだ縁でこの家に飼われることになったことを、「二樹の蔭」と洒落て言ったもの。

問五

見つめるでもなく漫然と「眺め」、撫でるでも抱くでもなく「いったまま奥へ這入つ」たとあることから、猫に対する**関心の薄さ**を読み取ろう。では、全く興味が無いのかというとそんなことはない。宿なし猫に対する同情や憐れみの気持ちもあつただろう。それはどこから読み取るのか。まず、「暫く眺めておつた」と、おさんの反応「見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した」(16行)とは、明らかに違うことに注目したい。猫を見る主人の心情は直接書かれていないが、眺めた末に下した結論が「内へ置いてやれ」だったのだから、**憐れみの情**を持ったと読むのが自然だろう。

さらに、「主人以外のものには甚だ不人望であつた」(33行)と比較して、「朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寐をするときは必ずその脊中に乗る」(35行)などの記述から、主人は猫をそばに置くことをよしとしていることを理解しよう。もちろんそれは愛情と呼ぶほどのものでもないし、「吾輩」も「あながち主人が好きという訳ではない」(36行)と言う。そんな**淡泊な関係**が両者の間に成立しながら物語が始まっているおもしろさを味わいたい。

なお、主人が出て来たのは「騒々しい何だ」(21行)と言いながらだった。「神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして」(40行)ともあるから、主人は神経質で騒がしいのが嫌いなのだということがわかる。したがって、おさんと猫の騒ぎを収めるためというのも飼うことにしてやれと指示した一

問八

選択肢判定

ア 「吾輩」は捨てられた猫であることを自覚しているので、人間に対していつも卑屈な態度で接している。  
「吾輩」という自称も人間を揶揄する視点も、決して「卑屈」な態度ではないので×。

イ

家に住みつてからの「吾輩」は、過去の経験を客観的に判断し、書生にもおさんにも感謝の気持ちを持っている。  
恨みは薄れたとしても「感謝」の気持ちは読み取れないので×。「返報」(20行)とある。

ウ

「吾輩」は、猫である自分と人間を比較したりして、出会う人間を観察し、批評的に見ている。  
猫の批評的な視点で人間社会を諷刺した作品なので正解。

エ

書生は「吾輩」が生まれて初めて会った人間であり、二番目に会ったのがおさんである。  
「かの書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇」(15行)とあるので正解。

オ

珍しい種類の猫でないからという理由によつて、人間は「吾輩」に冷淡であり、名前もつけてくれない。  
「甚だ不人望」(33行)「名前さえつけてくれない」(34行)とあるが、猫の種類とは関係ないので×。

カ

「吾輩」は、出会う人間すべてからつらい目に遭わされていたために、極度の人間不信に陥っている。  
「出会う人間すべて」からひどい目に遭わされているわけではない、極度の人間不信とはいえないので×。主人の膝や背中に乗り、「小供の寐床」にもぐり込んでいた。

文学史

ア 正岡子規 一八六七—一九〇二。俳人・歌人。雑誌『ホトトギス』を創刊し、写生俳句・写生文を提唱。短歌の革新にも着手。漱石の友人。

ウ

高浜虚子 一八七四—一九五九。俳人・小説家。正岡子規に師事し、雑誌『ホトトギス』を引き継ぐ。花鳥諷詠の客観写生を説いた。

エ

『明星』 与謝野鉄幹主宰の新詩社の文芸雑誌。

ク

『明暗』 漱石の最後の小説。未完。

ケ

『雁』 イの森鷗外(②)の小説。

問一  
④「論陣」は「議論・弁論をするときの論の組み立て・論争の陣立て」の意。「**論陣を張る**」という使い方が多い。

問二  
b「項」は「首の後ろの部分・襟首・首筋」なので、「項を屈する」は「首の前に垂れる・項を垂れる」ことだが、しょんぼりとしおれるさまの「**項垂れる**」では文脈に合わない。ここは、「五百の言には宗右衛門が**服**していた」(5行)「宗右衛門は**屈伏**して」(27行)とあるのが文脈上ほぼ同じ意味を表すと見て、「負けて従うさま」と読み取る。

問三  
漢文訓読調の「**てしててせしむ**」が使われている。使役の意味を明確にして、「**てにさせる**」の形をおさえること。「五百の言」の具体的内容は、「五百が商業を再興させようとして勧める」(2行)だ。

問四  
「会津屋へ調停に行く」(19行)「会津屋に往つて見れば」(22行)とあるので、**五百が安を、安の婚家会津屋に連れて戻った**ことが読み取れるだろう。

現在も親戚の家などを地名で呼ぶことは行われているが、本文は人名・地名・屋号が多く、一読しただけでは関係が頭に入りにくい。系図も参考にして、きちんと読み取ろう。アの「山内栄次郎の家」は、紺屋町のウ「日野屋」で、安の実家。安の嫁ぎ先の長尾家が、横山町で塗物問屋の工(会津屋)を営んでいた。イ「渋江の家」は記述なし。オ「中村座」は歌舞伎劇場のこと。

問五  
「好んで故事を引く」「例を引いて論ずる」とあるが、あげられた例は難解だ。作者はあえて故事を羅列して、読者の目をくらませる効果をねらっているのだろう。そのリズムやおもしろみを味わい、**故事の内容がわからなくても文脈から二人の主張を読み取る**ことが肝要だ。

まず、ここまでの内容から、安が実家に逃げ帰った理由をおさえよう。

問六

「声色」は「ものを言う声と顔色」のこと。「厲しい」は「厳しい・激しい」の意。ここでは宗右衛門の行いを責める五百の声も顔色も厳しかったということ。この論戦のエピソード(「来歴」)を述べるに先立ち、「**それはあるとき……**」(7行)と**概略を述べた一文**があることに注目しよう。また、傍線部の直後の「**屈服**して」と「**項を屈**した」(9行)の類似もヒントになるだろう。「本文の展開」・問二解説参照。

問七

次の①③の要素が必要。特に③を見逃さないようにしたい。

①五百は故事を引いてくる宗右衛門との論戦に、さまざまな中国の故事を引いて応じている。**漢文の素養**があることは当時の女性としては希有なことであった。男性に負けない**学識の深さ**に驚き、感嘆している。

②「声色ともに厲しい態度で忠告する五百の**精神力の強さ・勇ましさ**」も、「男性であれば……」と思わされたのだろう。

③宗右衛門が「五百の厳しい忠告を受け、涙を流して罪を謝した」(8行)とあるのも見落としてはならない。宗右衛門は五百の言動を、「男に生まれればよかつたのに。」と客観的に評価したわけではない。**五百の忠告に感服**したから、「涙を流し」たのだ。「五百の言には宗右衛門が服していた」(5行)、「かくまで信任した」(7行)と、**五百に対する尊敬・感服の念**はのちまで続いている。

問八

傍線部を含む一文は、「**こういう来歴があつたのである**」と結ばれて、「来歴」の紹介が終わっている。「来歴」の前の部分(1~9行)に戻って長尾の家の争いを考えると、**工が正解**。「本文の展開」・問三解説参照。

問九

「書を善く読んだ」(11行)は、漢籍を読むことができた、つまりオ「学問好きだ」ということ。商家の娘に学問を授け、身分差を超えて武士と

宗右衛門は酒気を帯びて娘の銚を「戯れのように煙管で」(12行)打ち、手向かうそぶりをした銚を拳で乱打した。安が止めようとすると、髪をつかんで引き倒して乱打し、「出て往け」と叫んだとある。宗右衛門は娘と妻に対し、酒に酔って理不尽で横暴な行動を取ったのだ。宗右衛門の主張は、**出て行った妻を非難し、自分の行動を正当化するもの**だという予想を立てよう。これに対する五百の主張は、**安をかばい、「宗右衛門が離々の和を破るのを責め」**(27行)る内容と読み取ることができるだろう。

読解パネル

論戦の内容に予想をつけよう。「語注と重要語彙」も参照。

宗右衛門 例 孔氏三世出妻・祭仲の女雍姫・斎藤太郎左衛門の女

妻を追いつ出すことの正当化・娘は父を敬うべきだという主張

×旗鼓相当だった 例 公父文伯の母季敬姜・顔之推の母・大雅思齋の寡妻兄弟

安が賢母であることの例証・妻や家族を徳化する家長の務め

選択肢判定

ア 子は親に対してどのようなときにも従順であるべきだということ。

イ 酒に酔って子供を虐待するなど一家の主人のすることではないということ。

ウ 例の羅列から「酒」「子供」「虐待」は読み取れず、妻のことが含まれていないので×。

エ 家庭の和こそが大切であり、妻子を虐待してはならないということ。

イ 宗右衛門が離々の和を破るのを責め(27行)に該当するので正解。

エ 家出をするのは妻に非があるとはいえず、謝罪したら許すべきであるということ。

オ 妻の実家を含め、親族の意見は重く受け止めるべきであるということ。

母・妻の例を引いているので、「親族」について述べているのではないと見て×。

結婚させるということは、「将来に期待」しているということだ。身分制度など**時代的・社会的な背景**を読み取ることも、小説の読解では大切だ。

選択肢判定

ア 長尾の家は代々の医家であつたが、当主の宗右衛門は書を好み、古今の故事に通じていた。

イ 敬は生まれつき少々気が強い性格でもめごとが多く、長じてからも家族に疎んじられていた。

ウ 安は優柔不断な性格で、夫の虐待にあつて実家に逃げても自ら戻つて来ることが多かった。

エ 安は五百に「有め謝して」(21行)連れ帰られている。「優柔不断」も読み取れない。

イ 五百は博学で思慮深い上に気の優しい女性なので、婚家からも実家からも頼りにされていた。

エ 婚家である若江家のことは記述がなく、「気の優しい」も読み取れない。

オ 銚は記憶力がよく学問好きだったので、宗右衛門は娘の将来に期待を寄せていた。

この子が大きくなったなら士女房に……書を善く読んだ(11行)と合致。

文学史

嶋外の「ドイツ三部作」と啓蒙的な文学活動は知識として備えておきたい。後期の活動では、「歴史離れ」したフィクションとしての歴史小説とは一線を画して、「**歴史其儘**」を理念とした歴史小説、さらに史実に徹した史伝へと移行していく。

ア 『海潮音』 上田敏の訳詩集。

ウ 『文学界』 北村透谷・島崎藤村(↓⑥)らが創刊した文芸雑誌。

カ 『即興詩人』 アンデルセンの長編小説。嶋外訳。

キ 『三田文学』 永井荷風創刊の慶大系の文芸雑誌。顧問に嶋外・上田敏。

コ 『山椒大夫』 「安寿と厨子王」の伝説をもとにした、嶋外の時代小説。

問一

④「寂寥」は「寂」の音「セキ」が読みにくく、「寥」は常用漢字外。「もの寂しいさま・ひっそりしているさま」の意味とともに覚えよう。

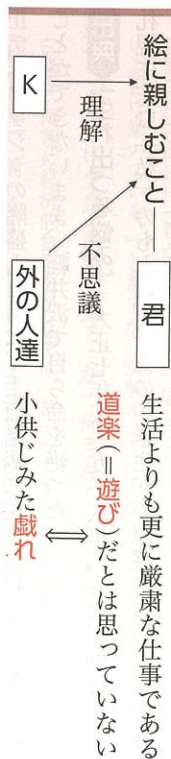
問二

a「玉座」は天子の座る所だから、「玉座を占む」で、「最上位を占めること、一番の価値があること」を表している。bの読みは「せんえつ」。

問三

「戯れ」は「遊び」のこと。「小供（子供）」と「大人」が対照されていると気づけば、「遊び」と「仕事」とが対照されるだろう。字数に合わせて、「価値がない」「役に立たない」などを適宜組み合わせさせて解答を作り上げよう。

読解パネル



問四

「君」の独白の内容と、傍線部直前の一文の二人の描写から、「惘鬱な」「燃えかすれた」は、**芸術の道を選んで現実に向かうすがたがなく、苦しんでいる様子**を表現していると読み取りたい。近代小説の読みにくさはあるが、選択肢を参考にするので、文意が明確になることもある。

選択肢判定

ア Kは、自分の生活と芸術上の矛盾に苦しむ「君」の力になりたいが、「君」が問いに答えてくれず、失望している様子。  
「君」の答えは7、11行にあり、Kは「君の心はよく解っていた」(13行)ので×。

問七

後文「じつと坐ったままではいられないような寂寥の念が真つ暗に胸中に拡がった」に注目しよう。ここまで「どうすればこの苦しきこの淋しさから救われるのだろう」(11行)「君はたまらないほど淋しくなってきた」(17行)と繰り返されていたが、**冷たく固く無味な握り飯＝現実の象徴**を口にしたことにより、生活に縛られて芸術の道に踏み出せない苦悩と寂寥感が、ついにこみ上げてきたのだろう。「**熱い涙**」は**絵に対する思いの表れ**と読み取ることが必要で、夕食やKとの関係について述べた選択肢ア・ウ・エは消去できる。

選択肢判定

ア 繊維のかたまりのような米粒を口にして、その味気なさに、Kの夕食の誘いを強情に断ったことを後悔したから。  
強情に断ったのではなく、察して断っている。「夕食」を理由とするのは×。  
イ 凍ってぼろぼろになった握り飯を口にしたとき、言いようのない淋しさが極限に達したから。  
「寂寥感」＝「淋しさ」と言い換えられているので正解。  
ウ Kは自分とは経済的に状況が異なっていて、交際も心から交わることはないと感じたから。  
Kは「君」にとって唯一の理解者。「経済的」状況を理由とするのは×。  
エ 暮らし向きが楽ではないのに、両親に気兼ねしてまで食事に誘ってくれたKのやさしさに感動したから。  
Kのやさしさは感じていたが、「寂寥感」と結びつかないので×。  
オ 冷たい握り飯によって、一日中下手な絵を描いていたことを思い出し、ふいに家族にすまない気持ちに襲われたから。  
家族のことよりも自分と芸術との問題が心を占めていると読み取って×。

問八

全体のまとめにあたる問題は、先に選択肢にざっと目を通しておくと、読解に有効な場合がある。

イ 室内の唯一の熱源である、燃えかすれたストーブから照り返す石炭の赤い炎が、二人の目にももの憂く映っている様子。  
単なる情景描写ではなく、二人の心理にふみこむことが必要なので×。

ウ 二人とも芸術の尊さを信じ、その価値を十分わかっていたが、厳しい現実の打開策が見つからず、もだえ苦しんでいる様子。  
理想と現実とが折り合わないこと、苦しんでいることなどを含んでおり、正解。

エ 口数少なく、互いの目も見ずにただ座っている二人に、何かを企む共犯者のような暗い熱気が漂っている様子。  
「まるで陰謀でも企んでいるよう」(10行)は、家族に対する「君」の後ろめたい気持ちであり、「君」とKが「何かを企む共犯者のよう」ではないので×。

オ 先行きの見えないそれぞれの人生に望みを失い、互いに傷をなめ合うかのようにいたわり合っている様子。  
次の段階として「君」に「自分を憐れむともKを憐れむとも知れない哀情がこみ上げ」たとあるが、「いたわり合う」ような行動・様子は読み取れない。

問五

「君」には漁師としての生活があり、一日スケッチに行くのは容易ではないだろうと想像した上で、「君」の芸術への情熱をふまえて答えよう。食事は「生活」「現実」と直結するものだ。弁当とK一家の夕食によって現実に戻される、この後の展開にも注意しよう。

問六

「君の言葉を聞くと」と前提があるから、その言葉をまず確認しよう。  
言葉の内容は、「自分はここで昼の弁当を食べるから、Kは夕食を食べてくればよい。」というものだ。Kの家の貧窮とKの父が「君」を歓迎していないことが記されているから、その両者を合わせ考える。「活路」とは「追い詰められた状態から逃れ出る方法」のことで、ここでは夕食のことで父に気兼ねすることなく「君」を引き止める解決法をさす。

選択肢判定

ア 芸術と生活との両立を考え、必死に働くが、経済的に立ち行かず、Kに支援してもらっていることを心苦しく感じている。  
Kは理解者であり、経済的に支援を受ける関係ではないので×。  
イ 家族のために働き、芸術は趣味にしようと考えているが、Kに芸術の道を勧められ、考えが揺らぐと感じている。  
芸術を趣味として考えられないことを苦しんでいるので×。  
ウ Kの支えを得て芸術の道を何とか進んでいるが、納得のいく絵が描けず、自分の才能に疑問を感じている。  
芸術の道を進めないように苦しんでいるので×。  
エ 現実生活を捨てて芸術の道へ進む決心がつかず、Kの思いやりが逆に自分の孤独を強調しているように感じている。  
芸術の道に進む決心がつかないこと、寂寥感・「孤独」の言い換えから正解。  
オ Kとともに芸術の道を模索してきたが、Kには仲のよい家族がいることを目の当たりにして、突き放されたように感じている。  
父への反抗・気兼ねの描写があるから「仲のよい」は×。「独りになると段々暗い心になり増えるばかり」(31行)とあるが、「突き放されたように」とは異なる。

文学史

- カ『青年』森鷗外(↓2)の小説。  
ケ『破戒』島崎藤村(↓6)の小説。自然主義。  
コ『枯野抄』芥川龍之介(↓5)の小説。

研究コラム

- 《反自然主義》  
白樺派 武者小路実篤 『お目出たき人』『友情』  
志賀直哉 ↓4 『暗夜行路』『小僧の神様』  
有島武郎 『或る女』『小さき者へ』  
余裕派 ↓1 高路派 ↓2 耽美派 ↓7

解法のポイント

問一

②は「空也上人をタズねて」なので、「訪問する」の意味の「訪ねる」。「尋ねる」は誰かに聞く場合。④は文語で「遂ぐ」、口語で「遂げる」。

問二

「ア」は「諸行無常」、ウは「涅槃」(23行)、エは「厭離穢土」(27行)「穢土を厭ひ」(27行)、オは「欣求浄土」(27行)「浄土を欣ぶ」(27行)の意味にあたる。

問三

「翡翠の大きな眼」(4行)は「翡翠のように」(美しく)「大きな眼」の意味で、翡翠の色や艶、宝玉としての高貴さなどを思わせる比喩として使われている。「ようだ」などの語を用いず、たとえであることを明示しない技法を陰喩(暗喩)という。①問三の「研究コラム」参照。

問四

13行にも「人と人との下らぬ交渉」とあるように、通常は「人と人との関係」という表現になるはずだが、あえて「人」を三つ重ねた作者の意図を汲み取ろう。13〜21行の内容や、リード文をヒントにすると、長年にわたって複雑な人間関係の中で心をすり減らし、疲れきってしまった主人公謙作の気持ちが生々しく想像できるだろう。

問五

読解パネル

13行 自身の過去を顧み、彼は更に広い世界が広がったように感じた。  
22行 仕事に対する……甘受出来る気持ちになつていた。  
23行 彼は仏教のことは……不思議な魅力が感ぜられた。

22行 仕事に対する……甘受出来る気持ちになつていた。  
→補強

23行 彼は仏教のことは……不思議な魅力が感ぜられた。

選択肢判定

ア

幸せそうな若い母親と比較し、乳飲み子を抱え自分との関係に苦しむ直子がか弱いように思えてきた。  
直子の事情も「かわいそうに思」うという謙作の心情も読み取れないので×。

イ

人のよい素朴な人々との暮らしの中で、直子の犯した過ちなどどうでもよいと思えるようになった。  
「どうでもよい」とまで達観していないから、直子のことを「もし……であつたら」ではなからうかと仮想していると見て×。

ウ

若く美しい寺の娘との立ち話を心待ちにするようになって、自然と直子から関心が離れていった。  
「この娘に対して別に何の感情も持たなかった」(39行)とあり、娘とのやりとりから直子を感じているので、「自然と直子から関心が離れていった」も×。

エ

寺の娘の言動を冷静に観察・分析し、直子のしたことも客観的に見られるようになってきた。  
本文全体から「観察・分析」する主人公の姿勢を読み取ることができ、直子のことを感情的にならず「客観的」に見ているので正解。

オ

寺での生活の中で仏教的な悟りの境地に魅力を感じ、直子のこと心の底から許せるようになった。  
直子のことを仮定して想像しているが、許す・許さないという観点ではない。

研究コラム 「直子の過失」

謙作の留守中に直子の従兄の要が、友人の水谷(5行)らとともに訪れ、花札をして遊んだ。水谷たちが帰ったあと、直子は要に強引に関係を迫られ、屈してしまう。話を聞いた謙作は「直子を憎もうとは思わない。自分は赦す事が美徳だと思つて赦したのではない。直子が憎めないから赦したのだ。」と自分に言い聞かせるが、わだかまりは消えず、「何所か山へでも行つて静かにして見たい。」と、翌年大山に入った。

問八

選択肢判定

ア 豊かな自然の中で快活な気分を取り戻した今は、仕事への執着も焦

「展げる」は「展望が広がる・広く見える」の意で、「開ける」に同じ。「広い世界が展げる」とは、「今までと違う広い視野に立ち、新しいものの見方・考え方で世界を捉えることができる」ということ。

問六

傍線部を含む段落(14〜17行)の内容をまとめることができれば解答できるだろう。

「人間が鳥のように飛ぶ」ということは「果たして自然の意志であろうか」とあり、飛行機は自然の意志に背くものだという視点がキーワードになる。そして、「人間が鳥のように飛ぶ」、すなわち「空中を征服」することは、「無制限な人間の欲望」で「人智におもひあがつている」と捉えている点、そのために「人間を不幸に導く」「いつかそのため酷い罰を被る」のではないかと述べている点を落とさずにまとめよう。

問七

謙作が直子とのことで悩み、遠く大山まで来て宿坊暮らしをしていることは、リード文に示してある。本文中に直子の名前が出るのはここが初めてであり、「過失」「ああいうこと」の内容も、直子に対する謙作の気持ちも、詳しく説明されていない。寺の娘を見ての感慨から引き出すことができるのは、直子が処女でなかったから男を恐れず近づけてしまひ、そのために「ああいう」「過失」が起こったということだけだ。

直子の過失は次の「研究コラム」に記したが、いきさつを知らなくても、本文全体を通して、大山での暮らしの中で主人公が心の落ち着きを取り戻し、心境が変化していることを読み取ることで解答できるだろう。描かれていない直子に対する心情については、常識や思い込みにとらわれないように注意しよう。

りも全くない穏やかな気持ちになつた。  
「仕事に対する執着も、そのため苛立つ気持ちもありながら」(22行)とあるので×。

イ

仕事に執着し、苛立つてきたこれまでを顧みて、仏教の教えに救いを感じ取り、帰依する気持ちが強まった。  
「不思議な魅力」(24行)以下、「気分はよくなった」「涙を流した」「手を合わせたような気持ちになった」とあるが、感覚的なもので、「帰依」とはいえないので×。

ウ

小動物を虚心に観察することで自然の中に生きる喜びを実感し、心の平安を取り戻し始めた。  
「この生活はよかった」(1行)、「快活な気分になった」(8行)とあり、さまざまな小動物の観察も描かれているので、本文の内容と合致。

エ

森や河原で無心に遊ぶ生活を送りながらも、現代人の罪深さを思い知り、悩みを深めている。  
「人類が地球とともに滅びてしまふものならば、喜んでそれも甘受出来る」(22行)とあり、「悩みを深めている」わけではないので×。

オ

山里の生活の貧しさに驚き心を痛めながらも、その中で精いっぱい生きる人々の姿に好感を抱いている。  
「米の質が極端に悪い」(33行)とあるが、「貧しさに驚き心を痛め」たと直接つながらず、また「精いっぱい生きる」具体的な描写はないので×。

カ

落ち着いた生活を送り自分の生き方を見つめ直す中で、過去の問題に拘泥する気持ちが少しずつ薄れてきている。  
問七解説参照。選択肢前半も本文と矛盾しないので正解。

文学史

ア 新思潮(派) 東大系の同人誌『新思潮』によって活動した人々。特に第三次・第四次同人の芥川龍之介(⑤)・菊池寛らをさす。

ウ

耽美派 官能による美的享楽を理想とするグループ。永井荷風・谷崎潤一郎(⑦)ら。『スバル』や『三田文学』によって活躍。

エ 通俗小説 芸術性の強い純文学に対して、一般大衆の好みに応じた娯楽性の強い文学。

ク

『カインの末裔』 有島武郎(③)の小説。  
コ 『父帰る』 菊池寛の戯曲。

問一

⑦「相場」は、「市場における物品の取引価格」のこと。

問二

a「釘をさす」は、「後で言い逃れができないように前もって念を押すこと」。

b「目をつぶる」には「過失などを見て見ぬふりをする」という意味の慣用表現もあるが、ここは文脈から「死ぬ」の意味。

問三

「具体的に説明せよ」という問いなので、お民のどのようなところに「敬意」というよりもむしろ「畏怖」を感じたのかを含めて説明する必要がある。二段階に分けて考えてみよう。解答としては、以下の二点をふまえた上で、「敬意」というよりもむしろ「畏怖」の感情を適切に言い換えて説明することが求められる。

読解パネル

- ①お住が敬意を感じたお民の働きぶり。
- ②お住は何に畏怖を感じているのか。

①まず、傍線部の前(1~2行)に書かれているお住の働きぶりをおさえよう。「骨身を惜しまず」「男の仕事を奪いつづけた」「時には夜も」「男まさりの嫁」などがある。

ただし、ここだけで「畏怖」の感情を説明するのは難しい。「**畏怖**」は「**威圧され、おそれおののくこと**」の意味で、自分に比べ圧倒的な力を持ったものに多大な脅威を感じることにだ。

②次に、傍線部に続く二行(2~3行)を見てみよう。この時代にあつては嫁がするのが当然の家の中の仕事を何もしないで姑に「押しつけ切り」のお民は、お住には到底抗えない**異人か魔物のような理解を超えた存在**になりつつあることがわかる。

反応。女の身で墓掘りをするというお民の言葉は、お住の意表を突くものだった。それに対して、なぜお住は「わざと笑おうとした」のかを考える。

自分の考えに相反することを主張する相手に、本気で反論するのとそれを笑うのとは、どう違うだろうか。笑うことで、「**まじめに反論するには及ばない・冗談しか思えない・愚かで非常識な考えだ**」ということを強調することになるだろう。さらに「わざと」とあるから、お住はこの自分の判断を相手に伝える意図をもって笑い飛ばそうとしたという点も、解答に盛りこむ必要がある。

問七

選択肢判定

ア 自分の弱みを嫁には見せたくないの、男手が必要だということの根拠を曖昧にしてお民を納得させようと腐心している。  
「**案**になりた(35行)」という本音は隠しているが、お民に泣きついて「**弱み**」を見せている。墓掘りの件は「**根拠**」にあたる。

イ 息子の死後、婿を取ることで家の再興を図ろうとしているが、気の強いお民を説得できずに困惑している。  
「**家の再興**」が目的ではなく、**案**になりた(35行)が理由なので×。

ウ 老いたわが身を励まして忍耐強く家の仕事をこなしているが、あまりの過酷さに次第に堪えきれなくなってきた。  
「**苦情**を言わずに、曲がった腰を伸ばし伸ばし(3行)働いていたが、桑畑の話(きつかけに)反抗(10行)したり口説き出した(21行)りしているの正解」。

エ どんなに苦しい生活であろうとも不平を言わず黙々と働き、お民に對しても長い目で見ようという寛容さを持つている。  
「**今度の婿を取りたはどのくらい痛切だか知れなかった(17行)などあり、寛容さをもつ余裕はなくなっている**と見て×。

オ 日ごろの不満が積もってお民を憎んでいるので、なんとかして婿と孫と自分の三人で楽な生活を始めたいと焦っている。  
「**憎んでいる**」とまではいえず、お民のいない生活を望んではいけないので×。

問四

選択肢判定

ア 金や土地への執着心から来る**精神的な病氣**。  
「**病**」といっても**医学上の病氣ではないので×**。

イ 仕事に対する**際限のない意欲**。  
欲求の強さを病にとりつかれたさまにたとえているので正解。

ウ 浪費家としての**金銭欲の深さ**。  
浪費が動機ではなく、「**家のためだ、広のためだ(39行)**とあるので×。

エ 労苦をいとわない**生まれつきの勤勉さ**。  
「**生まれつき**」は読み取れず、「**勤勉さ**」は「**病**」に直結しないので×。

オ 男尊女卑の社会に対する**対抗心**。  
動機は「**家のためだ、広のためだ(39行)**とあるので×。

問五

読解パネル

- ①どのようなことが決定されたのか。
- ②そのことによってお住はどうなると思ったのか。

少し前に戻って整理してみよう。お住はそれまでは「苦情を言わずに」(3行)「一生懸命に」(4行)働いていたが、桑畑と養蚕の話が出ると「とうとう愚痴まじりに」「お民に反抗」(10行)し、泣いた。その結果、お民は養蚕を断念したが、桑畑を作ることだけは自分の意を通した。

①は、その経緯をまとめればよい。  
②は、「この上忙しい思いをすることは到底お住には堪えられなかった」(9行)を軸に心情を書けば、設問の指示に合う。**お民に反抗しても自分の負担が減ることはいないとわかり、婿取りに目を向けた**という流れをおさえよう。

問六

「掘り役にやわしが出るわね」(24行)というお民の言葉に対するお住の

問八

選択肢判定

ア 貧しい農村における美しい家族の絆が情感豊かに描かれた叙情的な小説である。  
「**美しい家族の絆**」といった美談の要素はなく、「**情感**」「**叙情**」もあたらない。

イ 劇的なストーリーの展開の中に、飢えと重労働に苦しむ人間世界の不条理を描いている。  
ドラマチックな展開はなく、嫁と姑の確執を丹念に描いているので×。

ウ 旧弊な風習にとらわれる姑と、**理知的で近代的な嫁が、対照的な人物像として登場する**。  
嫁のお民はたくましく現実的だが、「**理知的**」はお民の形容としてあたらない。

エ 奇抜な趣向や素材を用いることなく、**農村の暗い生活の現実を見据えて描き出している**。  
架空の世界を設定した作者の多くの短編とは異なり、現実の生活を描いており、**自然主義的**ともいえる作風と見て正解。

オ 方言の会話のテンポのよさが、労働者のたくましさや**明るさを強調する**効果をあげている。  
方言の使用は「**明るさ**」をねらったものではなく、お住が言いよどむことが多いため、テンポがよいといえない。

文学史

ア 菊池寛 一八八八―一九四八。その小説がコの『恩讐の彼方に』。オの雑誌『文芸春秋』を創刊した。↓⑨『研究コラム』参照。

イ 徳田秋声 一八七二―一九四三。自然主義の小説家。『**微**』『**爛**』『あらくれ』などがある。

ク 『**今昔物語集**』平安時代末期の説話集。『**鼻**』のほか、『**羅生門**』『**芋粥**』の『**藪の中**』などが、同書に取材している。

ケ 『**鼻**』芥川の短編小説。異様に長い鼻を持つ**禅智内供**を主人公に、「傍観者の利己主義」とそれに左右される人間の悲しさを描く。